

YAMATO Nature Circle



2024年10月

葉画家・群馬直美のヤマトビオトープ園の葉っぱたち Vol.71

— 絵と文 群馬直美 —

ろくろ首の一つ目小僧の力《マンリョウの花》

ヤマトビオトープ園のザクロの木の隣りの隣りくらいにあるのが、マンリョウの木。
マンリョウの紅い実はよく見かけていたけれど、7月半ばの猛暑の日、可憐な花を咲かせていた。
「うわぁ～、かわいい」
マンリョウの花は、意外にも白く、下向きに咲いていた。
5枚の花びらが反り返り、真ん中から黄色いキツネの顔の様なものが出ている。
これは、5本のオシベのヤクで、そこから1本突き出た糸みたいなものが、メシベ。
結実した実のはじまりの姿は、長い舌を出し首の長い一つ目小僧のようでユーモラス。
つぼみたちは、ほんのり頬を染めた白イチゴみたいでおいしそう。
よく見ると、つぼみ、花びら、実のはじまり、柄にも細かな斑点が付いていて、
このちいさきものを描くのに、老眼鏡と拡大鏡眼鏡を二重に掛けても、
「うわ～ん、見えないよぉー、描けないよぉー」。
オシベのヤクにも、赤褐色の斑点が付いていて、
ずいぶん趣向を凝らした花のつくりを目を丸くした。
24年前にマンリョウの実と葉の付いた小枝を描いたことを思い出した。
そのときは、普通にスラスラ「うわぁ～ん、描けないよー」なんて、思うこともなく描いていた。
一体、今と何が違うのだろう？
若くて集中力も気力もあり、目も良くて細かいところまでよく見えて描く喜びにあふれていた……。
今は集中力も気力も衰え、目もかすみ細部が見えにくい分、
もっとよく見たいという欲求が強まり、
「これは到底描ききれものではない！」という苦しみと責めさいなまれている。
こうして描いたマンリョウの花。若いころにスラスラ描いたものにはない、
何かが宿っている様な気がするの、気のせいだろうか？
紅いろくろ首*の舌を出した一つ目小僧の妖気かな？

※紅いろくろ首 赤色の長い花の柄のこと

《表紙の絵》マンリョウの花

「葉っぱの縁は波状に盛り上がり、
指先で触れると面白い感触だよ。」

・ヤマトビオトープ園にて 2024.7.19採集
(作品の完成日は2024.8.9)

・紙(アルシュ極細目)/テンペラ・油絵の具

・size:180mm×260mm ©Naomi Gumma

群馬直美 GUMMA NAOMI プロフィール

高崎市生まれ。1982年、東京造形大学絵画科卒業。在学中に新緑の美しさ、その生命力に深く癒された経験から、“葉っぱ”をテーマとする創作活動に入る。「葉っぱの精神—この世の中の一つ一つのものは全て同じ価値があり光り輝く存在である」に則り、1991年テンペラで克明に描く現在の作風に至る。著書に『言の葉 葉っぱ暦』『群馬直美の木の葉と木の実の美術館』『葉っぱ描命』他。東京都立川市在住。 <https://www.wood.jp/konoha/>